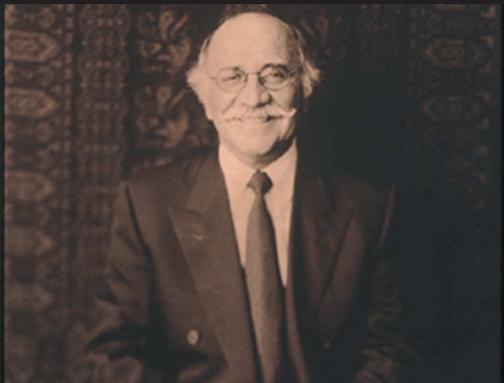


Special Interview

Tommy LiPuma トミー・リピューマ スペシャル・インタビュー!

★本誌独占!

【取材&文：加瀬正之】



ポール・マッカートニーがスタンダード・ナンバーをカバーした最新アルバム『キス・オン・ザ・ボトム』を手掛けた巨匠&名プロデューサー!

ザ・ビートルズ・デビュー 50 周年&ポール・マッカートニー生誕 70 周年となる今年の 2 月、少年時代のポールが慣れ親しんだ古き良きスタンダード・ナンバーをカバーしたアルバム『キス・オン・ザ・ボトム』がリリースされた。このアルバム誕生の立役者は、ポールと昔の曲について語り合い、ポールにダイアナ・クラールを推薦した名プロデューサーのトミー・リピューマ。

ポールはこの作品を通じて「トミーのような人と仕事をしていいと思うのは、彼がすごく博学なところ。(ビートルズ時代のプロデューサー) ジョージ・マーティンとの仕事を彷彿させたよ」と語っている。

ポールの中に古いスタンダードを歌うという構想は 20 年以上あったようだが、スタンダード作品で話題を呼んでいたロッド・スチュワートに対する気遣い等もあって躊躇していたようだが、トミー・リピューマとのタッグで見事な“ニュー・ジャズ・スタンダード”アルバムに仕上げてくれた。

今号の巻頭インタビューに登場して頂いたのは、巨匠&名プロデューサー、そのトミー・リピューマだ!

★このインタビューに先立ち、ユニバーサル・ミュージックのサイトにて、ハリウッドのキャピトル・スタジオにて行われた『キス・オン・ザ・ボトム』のインタビュー・ビデオ《対談：ポール・マッカートニー×トミー・リピューマ》が公開されましたが、そちらもご覧頂けると幸いです。

⇒ http://www.universal-music.co.jp/jazz/artist/paul_mccartney/index.html

★本誌のインタビューでは、トミーさんに当対談の内容と重ならないような質問をさせて頂きました。

まず最初に、今回あなたがポールをジャズの世界に誘ってくれたことに感謝しています。こんな作品の登場を長年待ち望んでいましたが、ポールのファン、そして、ジャズ・ファンたちも同じ気持ちだと思います。本当に素敵なアルバムで、正に“ニュー・ジャズ・スタンダード”と呼べる作品だと思います。

●ポールとニューヨークで今回のアルバムの企画について話した後、あなたがずっとプロデュースしてきたダイアナ・クラールをポールに推薦したと聞きましたが、何か直感や創造が働いたのですか?

その通り、ダイアナをポールに推薦したのは私だよ。ダイアナはこの時代の音楽をちゃんと理解している唯一の存在と言わないまでも、数少ないうちの一人だと

感じたんだ。それに彼女はポールの大ファンだったんだよ。

●ダイアナにポールのアルバムの企画について話した時の彼女の反応はいかがでしたか?

こんな素敵なハプニングが起こり得るのかととても興奮していたよ。そして、私に言ったんだ。「いつなのか教えて! そこに行くから!!」ってね(笑)。

●アルバムに参加したジャズ・ミュージシャンに、ロバート・ハースト、ジョン・クレイトン、クリスチャン・マクブライド、チャック・バークホーファーという 4 人のベーシストの名前がありますが、全てダイアナの提案で曲ごとにベーシストを選んだのですか? また、ポールと

共演したベーシストたちの反応はいかがでしたか？

それは私とダイアナの2人で決めたんだ。彼等は皆ダイアナと私が一緒に仕事をしているベーシストたちだったということは別にしても、4人とも紛れもなく傑出したミュージシャンたちだからね。彼等も皆ポールと共演できたことに興奮していたよ。

●個人的に、ポールがアップライト・ベースを弾きながらジャズを歌う姿を期待しているのですが、次のアルバムでの機会も含めてこのアイデアをどう思われますか？

私はポールがアップライト・ベースを弾くとは思わないよ。もし弾いたとしても、アップライト・ベースを弾きながら歌うというスタイルは心地良く思わないんじゃないかな。次のアルバムまで、今の時点では次にそのような機会があるかどうかは分からないね。

●ポールはあくまでも自分のスタイルで歌っていたと思いますが、レコーディングに先立ってポールと他のシンガーについて話したり、チェックしたりすることはありましたか？

一番初めのセッションの時に、自分が心地良く感じて、ストーリーを最高の形で伝えられるようなヴォーカル・スタイルを確認する作業をポールがほんの少しだけしていたよ。だけど、実際のところは、私もポールも誰かのスタイルをコピーするような必要性は全く感じていなかったね。

●ポールは今回のアルバムを発表したことで、今後の曲作りにおいてジャズから何か影響を受けると思えますか？

その質問は難しいね。君がポールに直接尋ねてみるべきじゃないかな？ でも、ポールが偉大なミュージシャンたちやあらゆる全ての音楽のスタイルにとっても大きな関心を持っているのかどうかは分からないよ。

●プロデューサーとして一番重要なことは何ですか？

アーティストがどんな能力を持っているのを見極めるセンスを持つこと、プロジェクトがどのような形になっても最適な曲を選ぶことはとても重要で、実際のレコーディングで行っていることをそのまま全て録音として残していることを確認する作業も重要だね。それと、正しいテンポであるか、テイクごとの感覚も大切だし、正しいテイクを選んでいくかという確認の作業

も大切なんだ。そのような過程を経て、最終的なミックスやマスタリングを行っていくんだ。

●現在のアメリカのジャズ・シーンについてどう思われますか？

私が心服しているひと握りのアーティストやプレイヤーたちを除いて、ジャズ・シーン全体に刺激を受けるようなことはないね。私は1936年生まれで、全てのプレイヤーがそれぞれ全く異なるスタイルで演奏していて、最初の数小節の演奏を聴いただけで誰が演奏しているか分かり得るような時代、ジャズが最も輝いていた時代に育ったから、コンテンポラリー・ジャズを演奏してるほとんどのミュージシャンたちに対してどうなんだろうと感じてしまうんだ。

●夢や実現させたい大きなプロジェクトなどはありますか？

おそらくレオン・ラッセルとアルバムを作ることになるだろうけど、チャレンジという部分で気分がとても高揚しているよ。でも、私の年齢を考えると、一度にひとつのことだけ、それ以上のことをするのは難しいね。

●最後に『キス・オン・ザ・ボトム』について、『The Walker's』読者にメッセージをお願いします！

このアルバムは、私が誰と一緒に仕事をしたかということだけでなく、これまでリリースされてきたあらゆる他のスタンダード・アルバムとは異なるサウンドであるということを確認するという意味でも、私のこれまでのキャリアの中で最大のチャレンジだった。最初にポールと会った時からアルバムが完成するまでに2年半という月日を要したのは、ポールのスケジュールとの兼ね合いが容易ではなかったということもあるけれど、大半は我々が選曲などを含めた素材、スタイルへのアプローチ、そして、私たちが声を掛けたミュージシャンに関して正しい決断が下されているかという確認作業に時間を要したからなんだ。これまでに私が関わってきた中で最高に満足感や充実感を得られているプロジェクトのひとつになったけれど、一緒に仕事をする上でこの最高の喜びをもたらしてくれたのはポールだったということは言うまでもないね。ポールは本当に私を含めて皆にそれぞれ自分たちの仕事をさせてくれたし、彼はどのようにすれば皆が気楽にくつろげるのか分かっているんだね。

P6ではトミーさんが手掛けた作品を紹介。P7は"PAUL meets JAZZ!"、P10でも新譜として紹介！

Tommy LiPuma プロデュース作品

トミー・リピューマは1936年7月5日生まれ。米国オハイオ州クリーブランド出身。元ジャズ・サクソ奏者で、後にニック・デカロとフランク・デカロとバンドを結成。バンド解散後にレコード・プロモーションの道に進み、リパティ・レコード～A&Mレコード～ブルー・サム・レコード～ワーナー・ブラザーズ～エレクトラ～GRP/インパルス～ヴァーヴ・ミュージックと渡り歩き、現在音楽プロデューサー、ヴァーヴ・ミュージック・グループ会長の肩書きを持つ。

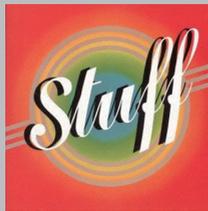
1978年にA&Mレコードが日本のアルファ・レコードと業務提携した際に来日し、デビュー間もないYMOを発掘し、3人を全世界で紹介したのが何を隠そうトミー・リピューマで、1986年に古巣CBSコロムビア・レコードを離れてワーナー・ブラザーズに移籍してきたマイルス・デイヴィスの晩年の名盤をプロデュースしたのもトミー・リピューマだ。

ジョージ・ベンソンやダイアナ・クラールをはじめ、これまで数多くのアーティストをプロデュース。グラミー賞を3回受賞、ノミネートは30回にも及ぶ。正に巨匠と呼ぶにふさわしい音楽人だ。その巨匠が手掛けた名盤の一部を紹介！【トミー・リピューマのサイト (Verve Music Group より) ⇒ <http://www.vervemusicgroup.com/tommylipuma/>】



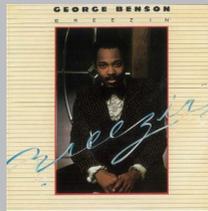
**カミン スルズ
オージェイズ
(インペリアル)**

トミーが一番最初に手がけたO'Jaysの1stアルバム。(1965年作品)



**スタッフ！！
スタッフ
(ワーナー・ミュージック)**

NYの名セッションマン6人で結成されたスタッフの1st。(1976年作品)



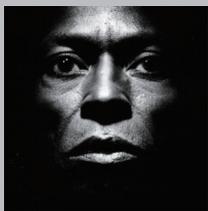
**フリージン
ジョージ・ベンソン
(ワーナー・ミュージック)**

「マスカレード」でグラミーも受賞した大ヒット・アルバム。(1976年作品)



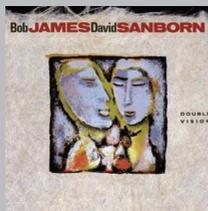
**イエロー・マジック・オーケストラ
イエロー・マジック・オーケストラ
(ソニー・ミュージックダイレクト)**

トミーの意向でリミックスされたYMOのデビュー US 盤。(1979年作品)



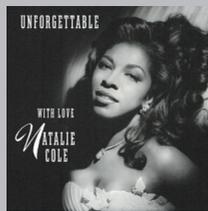
**ツツ
マイルス・デイヴィス
(ワーナー・ミュージック)**

CBSを離れたマイルスのワーナー移籍後、最初の作品。(1986年作品)



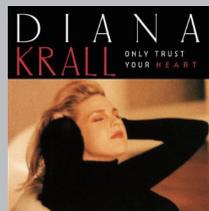
**ダブル・ヴィジョン
ボブ・ジェームス&デイヴィッド・サンボーン
(ワーナー・ミュージック)**

グラミー＆プラチナ Disc に輝いた2大スターの名コラボ。(1986年作品)



**アンフォゲッタブル
ナタリー・コール
(ワーナー・ミュージック)**

父娘デュオも泣けたグラミー7部門受賞の大ヒット作品。(1991年作品)



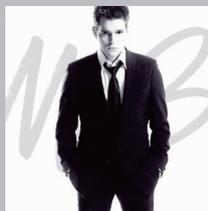
**オンリー・トラスト・ユア・ハート
ダイアナ・クラール
(ユニバーサル・ミュージック)**

衝撃的だったダイアナ・クラールのデビュー・アルバム。(1995年作品)



**モーメント・トゥ・モーメント
ロイ・ハークローヴ
(ユニバーサル・ミュージック)**

ロイのパラード&フリューゲル・ホーンも最高の快作。(2000年作品)



**イツツ・タイム
マイケル・ブーブル
(ワーナー・ミュージック)**

「ホーム〜きみのもとへ帰りたい」収録の大ヒット作品。(2005年作品)



**アメリカの歌
ウィリー・ネルソン
(EMI ミュージック)**

アメリカが誇るシンガー、ウイリーのスタンダード傑作集。(2009年作品)



**ノラ・ジョーンズの自由時間
ノラ・ジョーンズ
(EMI ミュージック)**

ノラの過去10年間の音楽コラボ作品を集めたアルバム。(2010年作品)

PAUL meets JAZZ!

こんな日が来ることを夢見ていたが、遂にその時が訪れた。あのポール・マッカートニーがスタンダード・ナンバーを歌い…ジャズ・ミュージシャンをバックにスタンダード・アルバムをリリースとは…。ポールの父親がアマチュアのジャズ・ミュージシャンだったことは知っていたが、ビートルズ時代～ソロを通じて、ポールとジャズとの接点をほとんど感じることができなかったため、“PAUL meets JAZZ!”という瞬間は一生実現することなどあり得ないのかも知れないと思っていた。

その他、ポールとジャズとの接点といえば、ビートルズが無名時代にホーム・グラウンドにしていたキャバレー・クラブは、元タラッド・ジャズのライヴ・ハウスで、ジャズ・ミュージシャンが演奏した後の休憩時間にスキッフル・バンドの演奏があったため、少なからずジャズ・ミュージシャンたちとの交流もあったのだろう。また、以前ニューヨークの名門ジャズ・クラブ「ブルーノート」で上原ひろみが公演を行った際に、ちょうどニューヨークにいたポールが客席にいたというニュースを読んだことがあったが、近い将来、ポールの“ブルーノート公演”、ポールと上原ひろみの共演などといったニュースが飛び込んで来る可能性もあるかも知れない。

より直接的な関わりとしては、ジャズ・ピアニストでマンハッタン・ジャズ・オーケストラ (MJO) のリーダー＝デヴィッド・マシューズは、ポールが1986年に発表したアルバム『プレス・トゥ・プレイ』に収録の「アングリー」でアレンジを担当しているが、この『キス・オン・ザ・ボトム』ほどジャズを感じさせる作品はこれまでなかった。これは名プロデューサー＝トミー・リピューマの存在なくしては実現しなかったであろうが、そのトミー・リピューマがポールに推薦したダイアナ・クラールの夫＝エルヴィス・コストロは、1989年に発表したアルバム『スパイク』からシングル・カットされた「ヴェロニカ」をはじめ、これまでにポールと度々共演していたという事実、その巡り合わせも面白い。

ポールはライナーのインタビューの中で「僕はジャズ・ミュージシャンじゃないから、いきなり厳しい環境に放り込まれた感じだった。ギターやピアノの後ろに隠れることができないからね。ナット・キング・コールが使っていたとエンジニアたちが言うマイクの前に立たされたけど、びっくりするぐらい怖かったよ！しかもジャズ・ミュージシャンの前で歌う訳だから、それもビビったね。とにかく手探りでやるしかなかった。その恐怖を乗り越えたら、すごく仕事しやすくなったんだ。」と語っているが、この作品に参加したジャズマンたちこそポールとの共演は恐れ多く、大興奮＆名誉に感じたに違いない。

ポールがビートルズ時代に歌った「ホエン・アイム・シックスティ・フォー」という素敵な曲があるが、ポールが69歳にして実現したジャズとの遭遇。ポール・マッカートニーが歌う“New Jazz Standard”アルバムの誕生です！



キス・オン・ザ・ボトム ポール・マッカートニー

ユニバーサル・ミュージック
UCCO-3038 SHM-CD
¥2,600 (tax in)
2012年2月8日発売

収録曲：

1. 手紙でも書こう
2. ホーム
3. イッツ・オンリー・ア・ペイパー・ムーン
4. もう望めない
5. グローリー・オブ・ラヴ
6. ウィ・スリー
7. アクセンチュエイト・ザ・ポジティブ
8. マイ・ヴァレンタイン (新曲)
9. オールウェイズ
10. マイ・ヴェリー・グッド・フレンド・ザ・ミルクマン
11. バイ・バイ・ブラックバード
12. ゲット・ユアセルフ・アナザー・フル
13. インチ・ワーム
14. オンリー・アワ・ハーツ (新曲)



写真提供：ユニバーサル・ミュージック

参加ミュージシャン：

ダイアナ・クラール (p)
エリック・クラプトン (g) on 8, 12
スティーヴィー・ワンダー (hca) on 14、他

プロデュース：

トミー・リピューマ